

# タンチョウ博士のお話（第13回）

今回はなぜ、長沼へタンチョウが来たのかについての質問です。  
質問は、〔中小〕金子真唯さん・たかせひめかさん・宮田彰さん、〔北小〕谷和珠さん、〔長高〕松浦さんなど10名の方からいただきました。

## ○なぜ、長沼町へぼくの仲間が来たの？

昔、長沼町は海だった。山の多い渡島半島と、日高や大雪山系を持つ北海道の本体との間にある浅い海だった。そこへ石狩川などから運ばれた土砂や、火山噴火による灰などが積もり、しだいに埋め立てられ、湿地や沼などの多い石狩低地帯へと、長い年月をかけて変化した。

ぼくたちが石狩平野の湿原にいつから住んでいたか、よくわからない。ともかく、19世紀終わりまで、長沼町やその近くで巣作りをしていたのは確かだ。でも、鉄砲でとられるなどして絶滅しかけ、ここ100年以上も、ぼくの仲間は長沼町へは来なかった。

しかし、1950年ころから君たちが親切にしてくれたおかげで、道東の釧路地方で仲間の数が増えてきた。そのため、暮らせる場所がしだいにせまくなった。そこで、まだ空き地のあった東の根室地方へ住むところを広げたが、そこもだんだんいっぱい。

つぎに空き地を探したのが、西の十勝地方。1970年ころから十勝の海岸や、十勝川沿いで暮らし始めたが、ここもそろそろ混んできた。しかたないから、21世紀になって、北の宗谷地方や西の日高地方へも移り住むようになってきた。

君たちも、お父さんやお母さんは同じ家に長く住んでいるね。では、家族が増え、みんなで一緒に住むのがむずかしくなったら、新しい家を別の場所に建てて住むのは、お父さんお母さん？それとも子供たち？

そう、多くは子供たちだ。ぼくたちも同じだよ。もともと日高地方は住めるところは少ないし、宗谷地方は寒くて冬を越すところが見つからない。そこで、若い仲間は、どこか住みよいところが石狩平野にないか、探しに来てるんだ。

ぼくたちに一番必要なのは、巣を造れる湿地だよ。長沼町に、自然のままの湿地はほとんどないけれど、舞鶴遊水地のようにヒトが作ってくれた湿地がある。それが本当に住むのによい湿地か、見さだめに来ているのさ。

立派な湿地ができれば、ぼくもぜひ住んでみたい。そうなれば、いつか君たちと友達になり、ぼくのあの有名な、優雅な「舞」を見せてあげられると思っているよ。

ヒトは湿地をどんどん開拓し、農地などを作り、そこをよりどころにする生き物を追い払ってきた。

ぼくたちも影響を受けた種のひとつだ。でも、今、長沼町のヒトがぼくたちのことを思い、ともに歩む姿勢を示し、ぼくたちの心に希望という灯をともしてくれた。ほんとうにありがとう。（文：正富宏之）  
※タンチョウ博士のお話は、来年度から隔月で連載します。（次回のお話の掲載は5月を予定）



写真1. 長沼町へ来たぼくの仲間